

A群溶連菌感染症 について

医療の
小ネタ

日常的にしばしば出会う細菌の中で、圧倒的に困った存在がA群溶連菌です。もちろん「人食いバクテリア」と呼ばれるこの細菌自体の毒力の強さも問題ですが、より切実なのは、一度感染したら、速やかにかつ徹底的に排除しないと、生涯にわたる腎障害を残す！ということです。とくに子供の間で流行しやすい感染症ですから、保護者の方々にしっかり対応していただかないと、本当に大変な禍根を残すことになります。



ウイルスや細菌に感染すると、人間の体はそれを排除するために「抗体」を作ります。敵をやっつけるミサイルのようなものですが、ただやみくもに飛んで行く訳ではありません。必ず相手の「目印」を見つけて、それを目掛けて攻撃を加えます。A群溶連菌の場合には、その目印は菌の表面にあるストレプトリジンO（SO）という構造体です。

ところが極めてマズイことに、人間の腎臓の細胞の表面にもSOが存在するのです。すなわち本来A群溶連菌を攻撃するはずの抗体が、自分の腎臓を誤爆してしまいます。したがって、体の中の免疫システムが、A群溶連菌の存在に気付いて抗体を産生し始める前に、大急ぎで菌を確実に消し去らなければなりません。本当に時間との戦いです。

治療には溶連菌に効果のあるAMPCを用います。通常の感染症では抗生剤を1週間以上用いることはありませんが、溶連菌の場合は2週間しっかり使用します。

自分は公平を旨とするたちなので、A群溶連菌感染症の際は、その度に必ず、上に述べた内容を（下手な絵を描きながら）説明しますが、一定の確率で「うちの子はクスリを飲みたがらない」という親がいて説得に手間取り、後の患者さんをさらにお待たせすることになります。